



出雲コクでは西の、西谷(現在の出雲市)・、東の、安来(現在の安来市)が二大巨頭として勢力を持っていた。出雲の西谷は、出雲コクが銅剣をシンボルとしていた時代の王の里であったカンバの隣りに位置し、伝統的に強い勢力を持っていた。斐伊川、神戸川、そして肥沃な出雲平野が豊かな生産力を導き、出雲コクの中心の座を占めていた。また、宍道湖と日本海を海上ルートに持ち、遠く朝鮮半島や九州、日本海沿岸との海上交流でも栄えてきた。安来は飯梨川、伯太川、そして肥沃な安来平野の生産力を背景に力をつけてきた。いわば東の巨頭である。伝統的に勢力を持っていた西谷に対して、安来は新たな勢力と言ってよいだろう。ここも中海を海上ルートに持ち、中国山地を越えて吉備地方との交易を行っていた。西谷と安来、この東西の両雄が四隅突出型墳丘墓とい

う、共通の墓をシンボルにして手を組むことで、出雲コクは強大な勢力を持つクニとして成長したのであった。

しのびよる

大和コク連合の影

西のほうで大きな勢力ができてくつあると知った大和をはじめとする近畿圏の諸国は慌てた。そして今まで争い合っていた近畿の小国たちは、邪馬台国の女王・卑弥呼を王に立てることで、強大なクニとしてまとまっていた。邪馬台国を筆頭とした、「大和コク連合」ができてあがったのである。

出雲コク同盟が力を持ち始めたころ、大和コク連合も近畿一円を中心にその力を広げていった。大和コク連合は全国制覇をめざすべく、まず、出雲コク同盟の中でも強大な勢力を持っている吉備コクと手を組むことを考えた。

「全国制覇のあかつきには、大和コク連合と吉備コクとの同盟政権としてくつではないか」

この誘いに吉備コクは動いた。ついに西谷コクとの関係を切り、大和コク連合と手を組むことを決めたのだ。

吉備は三種の神器である吉備独特の特殊土器を大和コク連合に贈るなど、かつて西谷と親密な関係を築いたときのように、大和コク連合に接近していった。吉備コクと手を組むことで力をより強固にしていた出雲コクにとって、吉備コクが離れることは大きな誤算であった。

大和コク連合は強大な武力をちらつかせながら、同時に大和コク連合が全国統一をしたあとの地位を保障するといふ、きわめて巧妙な政治交渉で他のクニにも



クから離れた。石見地方もすでに大和コク連合の支配下になっている。出雲西谷は、まさに孤立状態であった。

西谷を孤立状態に追い込んだ大和コク連合は、ついに直接西谷への圧力をかけ始めた。「出雲西谷の降伏」の交渉が始まった。斐伊川下流域では、小競り合いが何度か続いた。やがて交渉は決裂。両者は武力衝突になった。しかし、いかにかつては列強として名をあげた西谷といえども、吉備コクと大和コクの武力を背景に持った大和コク連合には太刀打ちできない。四隅突出型墳丘墓を造る最後のクニだった出雲西谷は、最後まで抵抗したが、それも長くは続かなかった……。

明暗を分けた西谷と安来

一〇〇年間にわたる出雲コク同盟の歴史は、こうして幕を閉じた。かつて出雲コクの雄として肩を並べていた西谷と安来は、お互いにまったく違う運命をたどっていった。新たな時代、大和コク連合による全国支配の時代を迎えたのちも、その地に脈々と続く勢力を維持することに成功した安来。一方、出雲コクのもっとも輝かしい時代に頂点に立ちながら、激動の時代の中で姿を消していった西谷。今ここに、一つの時代が終りをつけた。中国山地を隔てた強国・吉備や、遠く日本海沿岸の諸国と強い同盟関係を結び、出雲が時代の栄華を極めた時代の終りであった。出雲コク連合一帯が同じ墓を造り、同じ祭りを行っていた時代……。出雲コク連合のシンボルである四隅突出型墳丘墓も、「全国統一」という時代の変革の波に飲み込まれ、ひっそりと消えていったのであった。

出雲コク絶体絶命

大和コク連合の勢力は、ついに孤立した出雲コク内にも及び、伯耆と出雲のクニ境に大和コク連合の軍団は近づいてきた。

大和コク連合対出雲コクの戦いの火付は、まず安来で切られた。しかし大和コク連合の強大な武力は、出雲コク東の雄といえ、安来とは歴然たるものがあった。そこへ、大和コク連合のさらなる手が打たれた。安来に、大和コク連合傘下にはいることを勧める誘いであった。「わが傘下にはいることで、出雲コク内での安来の地位を保障する」

今までつねにナンバー二でいかなかった安来の王は、ここにきて悩んだ。安来王とその重臣たちは、今後のことを考へ意見が割れた。しかし、ついに大和コク連合傘下にはいる道を決断せざるをえなかった。出雲コクから遠くことで、勢力安泰をはかっていたのだ。その決断は、出雲コクのシンボルとして長年造ってきた、四隅突出型墳丘墓との決別をも意味していた。

出雲コク最後の皆・西谷の崩壊

安来を配下に入れた大和コク連合の影は、やがて島根半島付近もおおっていった。大和コク連合は、まず西谷近隣の小豪族である斐伊川中流の、神原(現在の加茂町)「三層」現在の三万屋町)の豪族に近づいていった。出雲コクの配下として自立できない存在だった両豪族は、大和コク連合の強力な武力と将来を約束されることで出雲コ



邪馬台国の所在地については、おもに九州説と畿内説があるが、「こ」は畿内説に基づいてストーリーを展開している。